

5. 授業

5.1 本校教育の特色

(1) グローバルイノベーターを目指す「5+4」のKIT/ICTスクールシステム

本校は、これまで培ってきたものづくり教育のノウハウを踏まえ、平成30年4月に新設した国際理工学科の学生に対し、社会が求める人材像を「グローバルイノベーター」と定義し、その人材育成プログラムの中核を成す能力開発を「考える力の育成」と定め、本校と金沢工業大学（以下、金沢工大）が共同で構築した教育「5+4」のKIT/ICTスクールシステムを提供します。

詳細は、<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/education/system/>で紹介しています。

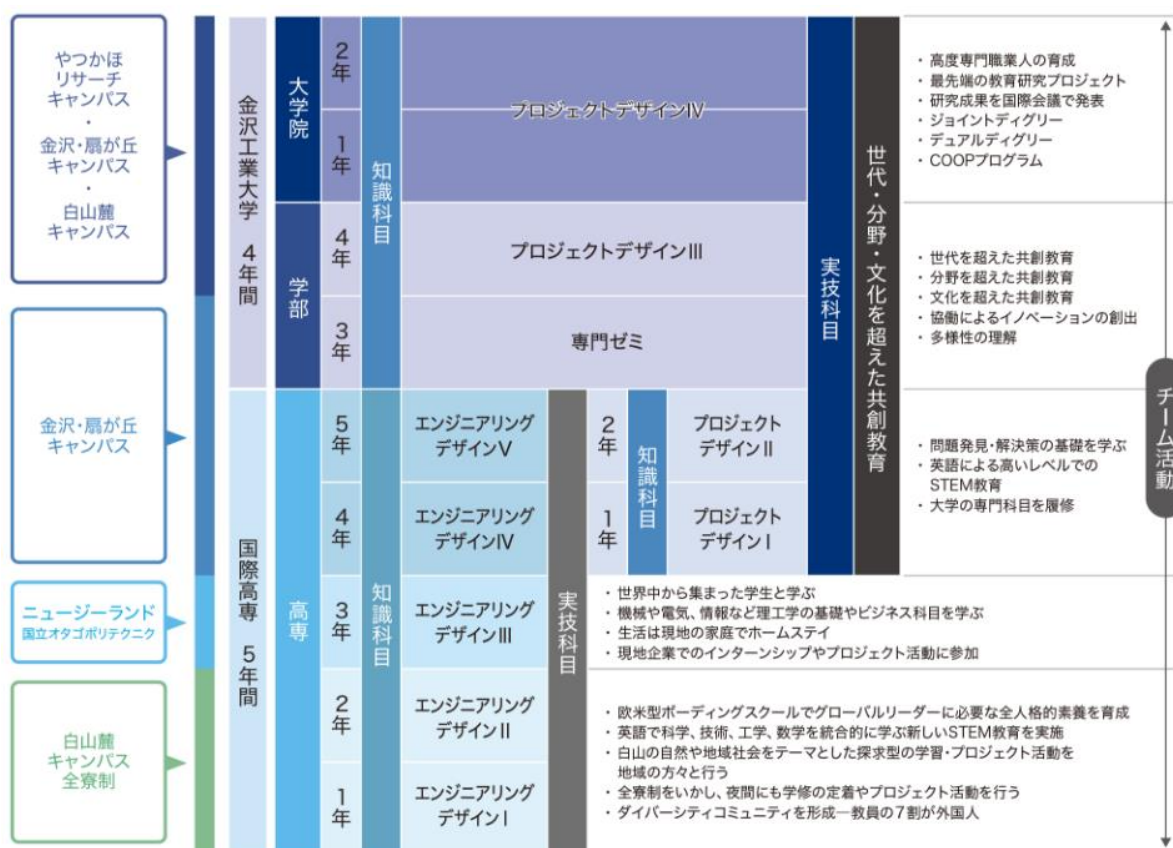


図5-1 KIT/ICTスクールシステム

(2) エンジニアリングデザイン教育

国際理工学科では、積み上げた知識をもとに課題解決をするだけでなく、様々な価値観の中で新たな価値の創出を目指すのが「エンジニアリングデザイン教育」を支柱としています。ユーザーの行動や気持ちを感じとり、そこから新しいサービスやモノを生み出す「デザインシンキング」を用いて、これまでの常識にとらわれない思考を育み、イノベーションの創出に挑みます。本校ではカリキュラムに、世界標準の工学教育CDIOを導入しています。CDIOは、Conceive（考える）、Design（設計する）、Implement（実行する）、Operate（運用する）の頭文字で、「工学の基盤知識となるサイエンス」と「実践・スキル」のバランスを重視し、質の高い工学教育を実現します。

詳細は、<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/education/>で紹介しています。

(3) English STEM 教育

国際理工学科は、研究開発の基礎となる科学、技術、工学、数学を英語で統合的に学ぶ STEM 教育を実施し、学生は理工学的思考力を身につけます。

1 年次は主に外国人教員と日本人教員のチームティーチングで授業が行われます。1 年次の前学期に開講される授業「ブリッジイングリッシュ」は、英語で行われる理工学系の授業での専門的な用語や言い回しを事前に学習させることにより、STEM 教育に対する学生達の理解を高めています。

4・5 年次では、金沢工業大学と連携したより高いレベルでの「English STEM 教育」に取り組みます。

(4) ものづくり教育

電気電子工学科、機械工学科、グローバル情報学科の 3 学科は、「人間形成」「技術革新」「産学協同」を建学綱領とし、金沢工業大学と共有する教育研究環境の下、専門科目と一般科目をくさび形に編成したカリキュラムにより、実践的・創造的技術者の養成を目的に 5 年一貫教育を実施してきました。

また、平成 19～21 年度の文部科学省「ものづくり技術者育成支援事業」に機械工学科が応募した『16 歳からの「将来の工場長、育成教育プログラムの開発と実施』が採択されたことを受け、地元企業・団体との産学連携により、ものづくり現場全体を俯瞰できる技術者育成教育に取り組んでいます。その一方で、産業のグローバル化に対応できる人材の育成に向けた教育を、本校の大きな特色として形づくってきました。

(5) 英語教育と海外協力提携校との交流プログラム

英語教育に力を入れている本校は、現在 24 名の外国人教員が専任教員として教鞭をとっています。学生達は普段の学校生活で外国人教員と触れ合うほか、海外協力提携校との交流プログラムにより、英語を学ぶ喜びを得ることができます。

① 2 年次 夏休み海外英語研修 米国セントマイケルズ大学（希望者のみ）

2 年次の夏期休暇を利用し、アメリカ・バーモント州のセントマイケルズ大学において約 1 ヶ月の『海外英語研修』を実施しています。平成 6 年度より実施されたこの研修は、英語圏での生活を通じた言語体験をさせるため、両校のアイデアを結集し作成されたもので、多い時は対象学生の半数近くが参加しました。現地の高校生や大学生が、授業やフィールドトリップにて、本校学生のパートナーとなり毎日行動を共にすることにより、英語や文化への興味が一層高まります。

平成 30 年度（第 24 回）は 7 月 9 日から 8 月 6 日にかけて実施され、電気電子工学科 3 名、機械工学科 4 名、グローバル情報学科 9 名、計 16 名が参加しました。

② 3 年次 1 年間 ニュージーランド留学 オタゴ ポリテクニク

平成 16 年度よりニュージーランド国立オタゴ ポリテクニク（以下 OP）と共同開発した 1 年間の『OP 留学プログラム』を正規カリキュラムに導入しました。このプログラムは参加希望学生に対し、本校 3 年次の単位を認定できるよう開発したユニークなものです。ホームステイ先家族との生活は、日本で思い描いていた海外と、実際に生活し異文化に直にふれた際の違いを体験することになり、また、黙っていても意思が伝わらない環境で、コミュニケーション能力の重要性を認識することになります。OP 留学では、英語や工学以外にも、人間形成の面で多くのことを体験することにより学ぶことができます。

平成 30 年度は、機械工学科 11 名、グローバル情報学科 8 名、計 19 名が参加し、令和元年度は機械工

学科4名、グローバル情報学科9名の計13名を派遣しています。

なお、国際理工学科の学生は3年次にオタゴポリテクニクへ全員が留学します。

③ 4年次 1週間 シンガポール修学旅行 シンガポール ポリテクニク

本校は、海外への修学旅行がまだ一般的でなかった30数年前より、約1週間の『シンガポール修学旅行』を実施しています。スケジュールには、観光以外に、シンガポールポリテクニクの学生との交流会やスポーツ交歓会などが含まれています。学生は、アジアの中で英語を公用語として発展している国を見ることで、英語の重要性を再認識します。平成30年度（第37回）は11月3日から11月10日にかけて実施し、電気電子工学科25名、機械工学科34名、グローバル情報工学科39名、計98名が参加しました。

また、平成元年からは同校学生を受け入れるMILEプログラムを続けています。平成30年度は12月10日から12月18日に29回目となる同プログラムを実施し、学生12名と引率教員1名が学生・教職員宅にホームステイしながら日本の文化、習慣、産業そして言語などを学びました。

(6) ラーニングエクスプレス

平成31年3月、「ラーニングエクスプレス2018」に電気電子工学科4年生1名、機械工学科4年生3名、グローバル情報学科4年生2名が参加しました。「ラーニングエクスプレス」とは、異なる国の学生たちが開発途上国や地域を訪問し、フィールドワークを通して地域発展、環境問題、持続可能な社会などの観点からの問題発見・問題解決策を提案し実施するという国際的ソーシャルイノベーションプロジェクトです。本校が参加して7度目となる今回は、日本（本校及び金沢工業大学）、シンガポール、インドネシアの学生たちがインドネシア・ジョグジャカルタ市近郊の村を訪問し、デザイン思考の手法を用いて提案を行いました。学生たちにとって生涯の糧となる良い経験になっています。

5.2 主要科目の特長や目標等

(1) 人間と自然Ⅰ・Ⅱ

能登半島国定公園内の穴水湾自然学苑にて、電気電子工学科・機械工学科・グローバル情報学科を対象に実施される合宿研修「人間と自然Ⅱ」は、本校教育の根本理念である「人間形成」を具現化する科目として位置づけられています。この科目は、大自然の中で学生と教員が寝食を共にし、海洋活動（カッター漕艇、遠漕、帆走）、グループ討議（ブレインストーミング、資料作成、発表）、クラスミーティング、講話（苑長講話、校長講話）などの活動プログラムや団体生活を通じ、学生同士或いは学生と教員とが積極的にコミュニケーションを図り互いの信頼関係を深め、科目の到達目標である「思いやる心を育み倫理観を養うこと」、「チームワークの大切さを知りリーダーシップを発揮できること」、「日本人としての自覚を深めること」の実践に努めています。

(2) エンジニアリングデザインⅠ～Ⅴ

国際理工学科では、「エンジニアリングデザイン」を柱として位置づけます。エンジニアリングデザインⅠ～Ⅱは、デザインシンキングをベースに持続可能な社会をテーマに新たな価値創生を目指すプロジェクト型の活動にチームを組みます。ユーザーへの共感を高めながら課題を見定め、課題解決のためのアイデアをカタチにしていきます。エンジニアリングデザインⅢは、技術的、工学的知識を総合的に理解します。

自分たちが選んだ分野で、教員や学生たちと協議を重ねながら設計概要をまとめ、それに沿った製作活動、システム作成を行います。製作目的や製作過程の説明文書を作成するとともに、プロトタイプ、コンピューターモデル、コンピューターシステム制作を行います。さまざまなプレゼンテーション技術を用い、プロジェクトの成果を学生、教員または企業の方々に英語で発表を行います。エンジニアリングデザインⅣでは、地域社会や産業分野への理解を深めながら、異なった専門分野のエンジニアと基礎的な工学知識や技能を發揮した協働作業を行い、より幅広い視野をもって何が社会に必要なかを捉え解決策を提案します。エンジニアリングデザインⅤでは、実社会の問題を取り上げ、使命感をもって学生が主体的・自主的に、計画立案、調査、分析、実験、考察、発表を通じて、問題発見から解決にあたる過程と方法を実践しながら学び、その成果は作品や論文として発表します。

(3) 創造実験Ⅰ～Ⅳ、創造設計Ⅰ～Ⅳ

電気電子工学科では「創造実験Ⅰ～Ⅳ、卒業研究」を、機械工学科およびグローバル情報学科では「創造設計Ⅰ～Ⅳ、卒業研究」を5年間一貫教育の柱として位置づけています。「創造実験」「創造設計」では、各分野における専門科目の知識がなぜ必要なのか、また、どのように活かすことができるのかを自ら考えることが重要です。ものづくりをテーマとして、学生自らの気づきを促し、学習意欲の増進に繋げるべく取り組みを進めています。そのため、各専門科目の配置も可能なかぎり創造実験、創造設計との関連を重視した配置とすることで、各学科の専門基礎知識の定着と創造性の醸成を目指しています。また、各学科の専門分野については、産業界のニーズを捉え、学生に求められる基礎的能力や知識が学べるように努めています。さらに5年次では、高専教育の集大成を図るべく卒業研究として、「基本的能力および能力の総合化」を実践しています。

(4) キャリアデザイン

人間には、自分が持つ能力が生かされ、価値観や態度を素直に表現でき、自分が納得できる役割を引き受けさせてくれるような環境を求める欲求があります。節目々々でしっかり意思決定を行わなければ、単に状況に自分を合わせることになり心からの成功を得ることができません。本校では、自分を一番生かせる道へ進むため、特別活動の時間を利用してキャリアデザインを行なっています。「ものづくり教育」はまた“自分づくり教育”でもあり、キャリア（専門能力、人間力の醸成）の発達が促進されます。キャリアデザインにより自己理解を深め、自身で意思決定を行ない、自己実現に向けて主体的に行なう姿勢を身につけていきます。つまり、自立／自律型の人材を育成するプログラムです。

(5) インターンシップ

4年次の夏期休業中の1～2週間に、インターンシップⅠ・Ⅱ（選択科目）が実施されます。本校では、開校以来、ほぼ全ての学生がこのインターンシップⅠ・Ⅱを受講しています。インターンシップⅠ・Ⅱは、単に企業での経験を積むだけでなく、企業内におけるコミュニケーションを肌で体験し、それまで学習した知識や技術を社会の場において活用することによって、学生自身がそれまでの学習を自己点検すると共に、残りの学生生活において、何を目標に学習するのかを「自ら考える」ことを大切にしており、新たな学習計画を立てる上で重要な位置づけとなっています。特に、5年次の「卒業研究」の準備教育として、インターンシップ終了後に行なわれる報告会は、学生の更なる自己啓発および進路開発の動機づけとなっています。

(6) 卒業研究

卒業研究は、学生がそれまで身につけてきた力を発揮する集大成の科目となっています。卒業研究で学生が取り組むテーマは、実際のものづくりに力点をおいたものが多く、企業において実際に取り組むレベルのテーマも含まれます。学生は、これらのテーマに取り組むことにより、それまで学んだ知識・技術・経験を活かして、ものやシステムの製作・開発を行ないます。また、これら一連のプロセスを、最終的に研究論文としてまとめ、第三者にプレゼンテーションをします。

このように、卒業研究では、ものづくりやシステム開発に学生が主体的に取り組むことによって、企業が必要とする「実践的な力」を身につけることができると共に、進学においては高い意識をもって、さらに深く専門分野を「学ぶ姿勢」が身につきます。

5.3 各学科で修得する知識・能力

(1) 国際理工学科

国際理工学科では、経済・産業のグローバル化、少子高齢化と労働人口の減少、自然災害、環境問題など、複雑かつ多様な課題により先行き不明な現代社会に伴い、課題解決に向けたイノベーションが期待され、変化に対応するのみならず、第四次産業革命における成長分野（AI、IoT・ロボティクス、ビッグデータ、セキュリティ分野など）を牽引することが持続可能な未来社会の創造へとつなげる、理工系人材の育成を目標とします。理工系リベラルアーツ教育と世界標準の工学教育 CDIO に基づくカリキュラムに基づき、グローバルイノベーターの育成を目指します。

(2) 電気電子工学科

電気電子工学科では、電気電子関係科目と、「情報工学」「コンピュータ演習」などの情報関係科目をカリキュラムに組み入れ、電気と電子に必要な知識を修得します。「電気回路」「電気磁気学」において電気と磁気の関係や回路解法の知識を身につけます。4・5年次では、半導体の基礎、トランジスタやICの仕組みを理解し、「電子回路」にて電子回路設計に必要な知識を身につけていきます。情報工学に関する専門分野、電気工学と関連のある材料工学、制御工学、システム設計などの専門分野をさらに掘り下げて学習していくことにより、電気電子に関するより高度な技術に対応する能力を身につけます。「創造実験」では、「工学基礎」「電気・電子の基礎・応用」「応用・発展」と、段階を踏んで発想力を体得していき、学生が専門教育で学んだ知識を実験やものづくりの場において活用することにより、技術者としての能力を高めていきます。

また、現代産業には欠かせない通信ネットワークシステムや電気情報に関する分野も同時に学び、自ら問題発見・解決のできるエンジニアの育成を目指しています。

(3) 機械工学科

機械工学科では、「創造設計Ⅰ」から「創造設計Ⅳ」まで、4年間のものづくりを通して機械工学の知識を身につけると同時に、メカトロニクス技術を構成する機械工学、電気工学、情報工学の3分野の技術を修得します。教室では2年次までに学修する「機械加工」、「機械製図」などの専門基礎から「材料力学」、「熱力学」などの専門応用までを学習します。製図室やコンピュータ演習室での「機械設計演習」では、設計計算から図面作成までのプロセスを修得します。実験室、演習室や夢考房で行なう「創造設計Ⅳ」ではメカトロニクス技術を総合活用し、一層の磨きをかける1年間の体験テーマとして、オリジナルロボットの設計製

作が用意されています。企業が実践しているものづくりの一連の流れを身につけながら、機械やシステムを総合的に把握して、設計から製品製作の現場までを有機的につなぐことのできるメカトロニクス技術に強いエンジニアの育成を目指しています。

(4) グローバル情報学科

グローバル情報学科では、情報技術に関する専門能力と経営の知識を有し、グローバル社会においてイノベーション創出に貢献できるエンジニアの育成を目指しています。情報教育では、ソフトウェア開発に必要なプログラミング技術及びネットワーク構築に関する技術の修得に重点を置いています。「創造設計Ⅰ～Ⅳ」は、学んだ知識を・技術を総合的に活用することで能力の定着を目指すものであり、授業はグループワークやプロジェクト型の学習が主となります。また、「情報ビジネス英語Ⅰ～Ⅲ」では、英語によるコミュニケーションの場を、日常生活から情報工学やビジネスの場へとステップアップさせ、国際社会で通用するプレゼンテーション技能やビジネス社会における英語の活用について学びます。つまり、社会において課題発見・解決ができる能力、グローバル社会で活躍できる能力を身につけるための実践的な教育を実施していきます。

5.4 学習支援計画書（シラバス）

授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業計画は、教育課程表及び学習支援計画書（シラバス）に明記しています。授業科目は、一般科目と専門科目に分かれており、それぞれに必修科目と選択科目があります。

カリキュラムは、次のホームページで紹介しています。

- 国際理工学科

https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/s/curriculum_s.pdf

- 電気電子工学科

https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/t/t_curriculum.pdf

- 機械工学科

https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/m/m_curriculum.pdf

- グローバル情報学科

https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/j/j_curriculum.pdf

学習支援計画書（シラバス）には、①科目の基本情報、②科目概要、③教科書及び参考書情報、④授業方法、⑤評価基準（評価項目、評価方法）、⑥学生の到達目標または行動目標、⑦各回の授業内容（1年間の授業計画）と学習課題、⑧補足情報（受講上の注意、資格試験との関連、オフィスアワー）が明示されています。学習支援計画書は、科目担当者が初回の授業にて学生に配付し説明しています。

令和元年度の学習支援計画書（シラバス）については、次のホームページで紹介しています。

- 国際理工学科

<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/s/>

- 電気電子工学科

<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/t/>

- 機械工学科

<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/m/>

- グローバル情報学科

<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/curriculum/j/>

5.5 単位認定と成績評価

学業成績の評価は、試験の成績、平素の学習状況及び出席状況を総合し、学習支援計画書（シラバス）の評価基準に従って行ないます。学業成績は、各学期末に科目ごとに、それぞれの科目の担当教員が、授業時間数の5分の4以上出席している者について、その科目を履修したものと認め評価します。そして学年末成績の評価が100点を満点とする評点により、60点以上の科目について、その科目の単位を修得したものと認定します。この評価は表5-1に示す区分により評定され、指導要録、及び成績証明書などに記載されます。単位追認試験を受けて修得した科目の評価は60点とします。なお、正当な理由なく定期試験を受けなかった場合、または懲戒処分のため試験を受けることができなかった場合には、当該の試験の成績を0点とします。

表5-1 総合評価点数と評定

評点	100~90	89~80	79~70	69~60	59~0	0
評定	S (秀)	A (優)	B (良)	C (可)	D (成績不良)	F (出席不良)
GPA	4	3	2	1	0	0

個々の科目の成績評価に基づき、全履修科目における1単位当たりの成績評価の平均値を示すGPA(Grade Point Average)を活用しています。これにより、全体的な成績評価として各学期終了時点での成績状況を確認できます。また、GPAによる成績評価は、今後の修学指導における基礎資料となるばかりではなく、就職指導や大学への進学指導（大学への編入学推薦出願資格）における基礎資料としています。

$$\text{GPA} = \frac{(\text{評価ポイント} \times \text{単位数}) \text{の総和}}{\text{履修科目の総単位数}}$$

※小数点以下3桁目を四捨五入し、小数点以下2桁までとします

《平成30年度以降入学生適用》

各年次における開講科目数と開講単位数は、表5-2、5-3の以下のとおりです。

表5-2 1年（「教育課程表」平成30年度以降入学生適用）

		国際理工学科		
		開講科目数		開講単位数
		日本人	留学生	
必修	一般	21	18	29
	専門	6	6	8
選択	一般	3	3	3
	専門	0	0	0
合計		30	27	40

表5-3 2年（「教育課程表」平成30年度以降入学生適用）

		国際理工学科		
		開講科目数		開講単位数
		日本人	留学生	
必修	一般	20	18	29
	専門	6	6	8
選択	一般	4	4	7
	専門	0	0	0
合計		30	28	43

《平成 27 年度から平成 29 年度以降入学生適用》

各年次における開講科目数と開講単位数は、表 5 - 4、5 - 5、5 - 6 のとおりです。

表 5 - 4 3 年（「教育課程表」平成 27 年度から平成 29 年度入学生適用）

		電気電子工学科		機械工学科		グローバル情報学科	
		開講科目数	開講単位数	開講科目数	開講単位数	開講科目数	開講単位数
必修	一般	9	21	9	21	9	21
	専門	6	12	7	12	7	12
選択	一般	0	0	0	0	0	0
	専門	0	0	0	0	0	0
合計		15	33	16	33	16	33

表 5 - 5 4 年（「教育課程表」平成 27 年度から平成 29 年度入学生適用）

		電気電子工学科		機械工学科		グローバル情報学科	
		開講科目数	開講単位数	開講科目数	開講単位数	開講科目数	開講単位数
必修	一般	3	4	3	4	3	4
	専門	10	21	10	21	10	22
選択	一般	4	10	4	10	4	10
	専門	6	10	6	9	6	10
合計		23	45	23	44	23	46

表 5 - 6 5 年（「教育課程表」平成 27 年度から平成 29 年度入学生適用）

		電気電子工学科		機械工学科		グローバル情報学科	
		開講科目数	開講単位数	開講科目	開講単位数	開講科目	開講単位数
必修	一般	0	0	0	0	0	0
	専門	10	23	8	21	11	25
選択	一般	5	10	5	10	5	10
	専門	4	8	9	16	4	7
合計		19	41	22	47	20	42

5.6 進級要件及び卒業要件

進級や卒業の基準は、国際高等専門学校学則第12条に規定し、必要な学力（取得単位数）と人間性（「特別活動」「人間と自然」の教育成果）を備えた学生について、規定に基づき進級や卒業を認定しています。進級や卒業の判定に当たっては、定量的な判定資料に加え、学科単位による事前評価、教務委員会、全教員による教員会議での予備判定を経て、校長・主事・学科長・主任・事務局長等からなる学務会議にて総合的に判定しています。

進級の要件

次の条件を満たしている者については、第1学年から第4学年までは、その学年の課程を修了したものと認定し、次学年に進級できます。

- (1) 学則に定める学年の修得最低単位数を修得していること。
- (2) 当該学年における欠席日数が出席すべき日数の5分の1未満であること。
- (3) 当該学年の特別活動の単位が認定されていること（平成29年度以前入学生適用）

同一学年再履修の制限

同一学年の再履修は、1回を超えてはなりません。

卒業の要件

次の条件を満たしている者については、本校の課程を修了し卒業を認定します。卒業を認定された者には、準学士（工学）の称号が付与されます。

- (1) 学則に定める修得最低単位数を修得していること。
- (2) 卒業までに特別活動に90時間以上参加していること（平成30年度以降入学生適用）。
- (3) 当該学年の特別活動の単位が認定されていること（平成29年度以前入学生適用）
- (4) 当該学年における欠席日数が、出席すべき日数の5分の1未満であること。

《平成30年度以降入学生適用》

進級・卒業に必要な単位数を表5-7に示します。

表5-7 進級及び卒業に必要な単位数

		単位数	学年別配当				
			1年	2年	3年	4年	5年
合計	一般科目修得最低単位数計	83	30	30	13	8	2
	専門科目修得最低単位数計	84	8	8	19	24	25
	修得最低単位数合計	167	38	38	32	32	27
修得最低単位数総計			167				

進級の特例

進級の要件の(1)のみを満たすことのできなかった者のうち、第1学年から第3学年までは次の(ア)及び(イ)、第4学年にあつては(ア)～(ウ)のすべての要件を満たす者に限り、当該学年を修了したものと認定し、次学年に進級できます。

(ア) 表5 - 8に示す当該学年修了に必須となる授業科目の単位が認定されていること。

表5 - 8 当該学年修了に必須となる授業科目

学科	科目	
	1年	2年
国際理工学科	エンジニアリングデザインⅠA及びⅠB	エンジニアリングデザインⅡA及びⅡB

(イ) 修得単位数が、表5 - 9に示す進級に必須となる累積単位数を満たしていること。

表5 - 9 進級又は卒業に必須となる累積単位数

学科	学年	1年	2年	3年	4年	5年
	国際理工学科		26 (38)	72 (76)	100 (108)	133 (140)

注1) 下段 () は修得最低単位数合計

(ウ) 第1学年から第3学年までの必修科目の単位をすべて取得していること。

≪平成27年度から平成29年度入学生適用≫

進級・卒業に必要な単位数を表5 - 10、5 - 11に示します。

表5 - 10 進級及び卒業に必要な単位数 (電気電子工学科)

		単位数	学年別配当				
			1年	2年	3年	4年	5年
合計	一般科目修得最低単位数計	79	24	20	21	8	6
	専門科目修得最低単位数計	88	9	15	12	25	27
	修得最低単位数合計	167	33	35	33	33	33
特別活動		5	1	1	1	1	1
修得最低単位数総計		172	34	36	34	34	34

表5 - 11 進級及び卒業に必要な単位数 (機械工学科・グローバル情報学科)

		単位数	学年別配当				
			1年	2年	3年	4年	5年
合計	一般科目修得最低単位数計	79	24	20	21	8	6
	専門科目修得最低単位数計	88	9	12	12	26	29
	修得最低単位数合計	167	33	32	33	34	35
特別活動		5	1	1	1	1	1
修得最低単位数総計		172	34	33	34	35	36

進級の特例

進級要件の(1)のみを満たすことのできなかつた者のうち、第1学年から第3学年までは次の(ア)～(ウ)、第4学年にあつては(ア)～(エ)のすべての要件を満たす者に限り、当該学年を修了したものと認定し、次学年に進級できます。

(ア) 表5-12に示す当該学年修了に必須となる授業科目の単位が認定されていること。

表5-12 当該学年修了に必須となる授業科目

学科	科目			
	1年	2年	3年	4年
電気電子工学科	創造実験Ⅰ	創造実験Ⅱ	創造実験Ⅲ	創造実験Ⅳ
機械工学科	創造設計Ⅰ	創造設計Ⅱ	創造設計Ⅲ	創造設計Ⅳ
グローバル情報学科	—	—	—	創造設計Ⅳ

(イ) 修得単位数が、表5-13に示す進級に必須となる累積単位数を満たしていること。

表5-13 進級又は卒業に必須となる累積単位数

学年 学科	1年	2年	3年	4年	5年
電気電子工学科	26 (33)	61 (68)	94 (101)	127 (134)	167 (167)
機械工学科	26 (33)	58 (65)	91 (98)	125 (132)	167 (167)
グローバル 情報学科	26 (33)	58 (65)	91 (98)	125 (132)	167 (167)

(ウ) 前年度までに、修得すべき授業科目の単位が認定されていること。

(エ) 第1学年から第3学年までの必修科目の単位がすべて認定されていること。

5.7 アンケート調査及び教育改善

本校は、教育改善を目的に「授業アンケート調査」及び学生、教職員、卒業生、企業を対象とする「総合アンケート調査」により、授業のみならず学生支援や課外活動及び学習環境など、幅広く情報を収集しています。分析及び分析結果報告は第三者である学外の専門家に依頼し、報告書を全教職員へ配付するとともに報告会を開催し、状況の周知及び改善点の共通認識を図っています。同調査結果報告書は、ホームページにて公開しています。浮かび上がった改善点をもとに ICT 教育評価委員会が改善案を作成し、学務会議で審議された後、改善の実施へと移されます。また、各教員は年度末に1年間の活動について自己点検評価し、その報告書「教育改善への取組と今年度の目標及びその成果」を校長に提出しています。

ICT 教育評価委員会は、教育力向上を目的に、年3回全教職員を対象に研修会を開催しています。「FD 研修会」では、学習意欲の向上などをテーマに、専門家による基調講演の後、グループ討議及び発表を行ない組織的教育力の向上を図っています。

さらに3月には、その年度のFD活動の成果を発表する「教育成果発表会（公開發表）」を開催しています。なお、各教員が授業において実践した活動内容については、「教育成果発表会」や「創造技術教育（教育研究報告書）」によって全教職員に公開され、個々の教員の優れた教育実践例のノウハウを共有しています。

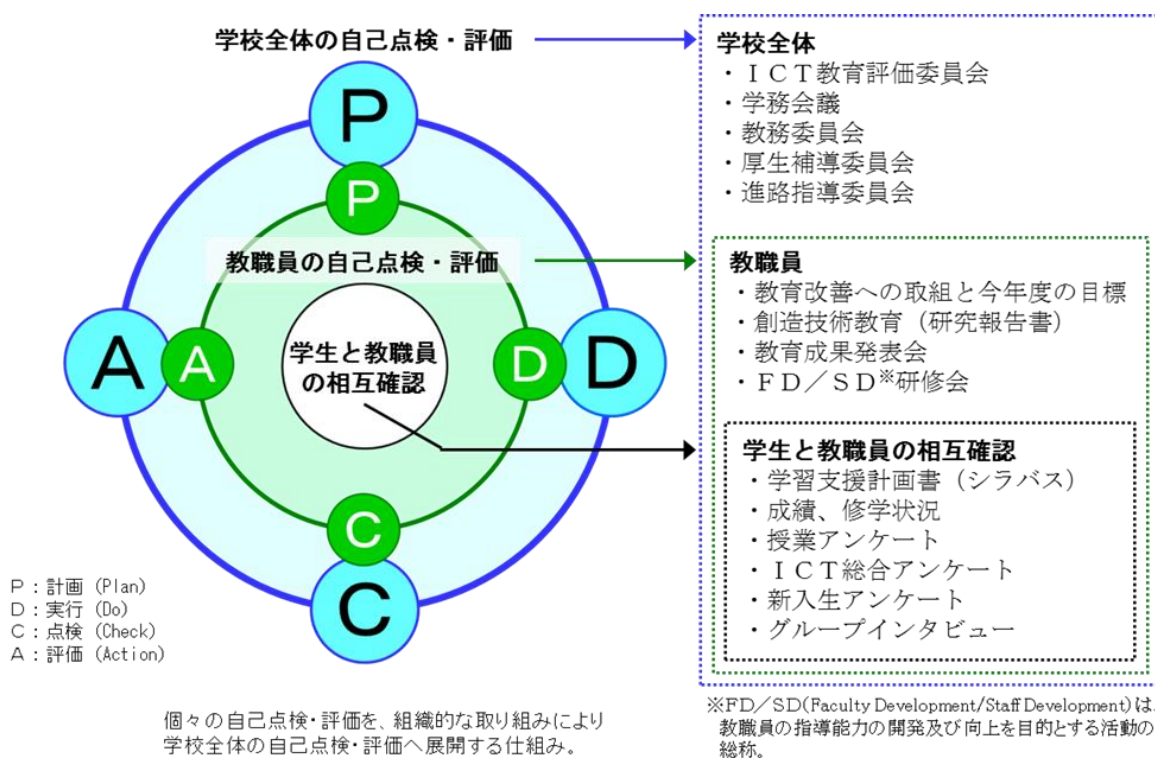


図 5 - 2 自己点検評価概念図

また、本校で開講している全ての授業科目で学生による授業アンケートを実施しています。代表的なアンケート項目とその結果は次のホームページで紹介しています。

■ 授業アンケート・総合アンケートの詳細

<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/about/evaluation/fdequete/>